



改訂の5つのポイント



中邑光男

「和英辞書は使えない」としばしば言われる。英訳したい日本語が用例として載っていることはまれだから、ということだろう。

4年前に『ジーニアス和英辞典』第3版の編纂をスタートさせた私たちは、この和英辞書のイメージを打ち崩したいと思い「日本人が必要とする和英辞書とはどのようなものか」を考え続けた。その結果、多くの試行錯誤をへて、編纂の方針が決まっていたのである。本稿では、その中のとくに重要なポイント5つに絞って紹介しよう。

①よく使われる日本語とふつうの英語からなる用例を示すこと

ユーザーが英訳したい日本語を辞書の中に見つける可能性を引き上げるためには、よく使われる日本語を見出し語・複合語・用例として取り上げるしか方法はない。そのため、日本人編纂者は、自らの語感だけに頼るのではなく、Googleなどのサーチエンジンを駆使したりデータベースを利用したりして、よく使う日本語の言い回しをもらさずあげるようにした。さらに『明鏡国語辞典』編纂スタッフの協力を得て、より自然な日本語を示すように試みた。

次に、日本人編纂者はネイティブ編纂者と意見交換を重ねて、日本語を英語に訳していった。その際、ネイティブ編纂者には、「しゃれた英語」ではなく、彼らが毎日のように使う「ふつうの英語」を示してほしいと依頼した。日本人がしゃれた表現を使うと、コミュニケーション上困ることがあるからだ。私の経験を例に引こう。「万事休

すだ」にあたる英語に The jig is up. がある。しかし私がこの表現を使ったとたんに、米人から容赦のない「ネイティブ英語」で話しかけられたことがあった。私が英語に習熟していると誤解したからであった。この経験から私は、第3版では次のようにふつうの英語を示した。

ばんじ [万事] Ⅱ

万事休すだ [=すべて終わりだ] It's all over now.; [=もう手の施しようがない] There is nothing I can do now.

同時にこのような表現は応用がきかないことが多い。一部のことばを取り替えて「使い回し」できないことが多い。上の例でいえば The jig is up. は時制を変える程度にしか応用できないが、There is nothing I can do now. であれば、nothing, I, can, now などを別のことばで置き換えることができる。ネイティブ編纂者にふつうの英語を示してほしいと依頼したのは、このように、応用可能な表現を増やすためでもある。

②「中見出し」に関する使い分け情報や語法を充実させること

中見出しとは、見出しの日本語にほぼ対応する英語表現を用例の前に太い書体で示したものだ。残念ながら、全ての用例に目を通して適切な表現を選ぶ学習者は少ないだろう。多くの学習者は、ある日本語に対する代表的な英語表現を調べて、それをすぐに使おうとする。そのような学習者でも、中見出しを使うことによって、正しい英語を作る可能性が高くなるはずだ。

1つの見出し語に対して中見出しが2つ以上あることは珍しくない。その場合、学習者が中見出しを正しく使うには、中見出し間の違いを把握しなければならない。そう考え、第3版では中見出しを使い分けるための情報を充実させた。

「おもしろい」を英語にする場合を考えよう。この辞書では次のように6つの単語を示し、意味の違いを示した。その際に、日本人がよく使う単語を取り上げ、英語国発の英語類義語辞典よりも、「日本人に優しい」情報を提供するようにした。

おもしろい [面白い]

① [愉快的・楽しい]

(興味を引き起こす) **interesting** ; (興奮させる) **exciting** ; (楽しくさせる) **enjoyable** ; (こっけいで楽しくさせる) **amusing** ; (魅了する) **fascinating** ; (見聞きさせて楽しませる) **entertaining**

中見出しを使いこなすのにさらに詳しい情報が必要である場合には、**使い分け**や**語法**欄を設けて解説した。例えば「故郷」に対応する表現には hometown や home がある。しかしこの2語には「今住んでいるところ」の意味もあり、コミュニケーション上問題となることがある。過去にその経験をしたことのある私は、次のように詳細な**語法**を書くことにした。

こきょう [故郷]

hometown [C], home [C]

語法 hometown は生まれたところ、子供時代を過ごしたところを指す。home は愛着を感じている故郷を意味する。この2語は現在住んでいるところも指すので、誤解が生じる恐れのある場合は「生まれ(育った)ところ」の意の the place where she was born (and brought up) のように言うのがよい。

③表現の立場からの注記を充実させること

英語の表現力を伸ばすためには、自信を持って使える英語を増やす必要がある。そこで、第3版では、日本人が英語を使うときに注意すべき点にできるだけ言及した。

冠詞は私たちが英語を理解する際の難関の1つだが、次のように適宜説明した。

かんしょく [感触]

feeling [C] [通例単数形で] || 必ず合意に達するとの感触を得た I got a [the] feeling that we would certainly reach an agreement. 《◆ 得たいろいろな感触のうちの1つの場合は a feeling》

ネイティブスピーカーにとっては、a feeling は「多くの感触の1つ」であり、the feeling は「たった1つの感触」であることは当たり前であろう。しかし日本人学習者にとっては、このような注記はいくらあっても十分ではない。

また、英語では同じことばをあまり繰り返すべきではないが、その点についてはたとえば次のように触れた。

かたぬき [型抜き]

(クッキー用の) **cookie cutter** [C] || 型抜きを使ってクッキーの生地を星型に抜く make star shapes out of cookie dough with a (cookie) cutter 《◆ cookie の繰り返しを嫌って2つ目の cookie を省略するのがふつう》

表現の立場からことわざを見れば「有名なことわざは全部言わなくても伝わる」という点が重要だ。これを利用して、ことわざを途中までしか言わないというカッコいい話し方も可能である。

うわさ [噂]

うわさをすれば影(ことわざ) Speak [(英) Talk] of the devil (and he will [is sure to] appear). 《◆ 英語は文字通りには「悪魔の話をする(ときっと現れる)」の意味。()の部分は省略するのがふつう》

この辞書のユーザーは、このような注記を読むだけで、英語表現の勘どころを効率よく学ぶことができるだろう。

④名詞の[U] [C]用法に関する情報をできるだけ詳しく示すこと

多くの名詞は[U]と[C]の両方の用法を持つ。そのためその違いを「気にしなくてもよい」と考える学習者は多い。しかしながら、彼らが英語にさらに慣れるためには、名詞の[U]と[C]との意味・用法の違いを理解することは避けられない。そこで第3版では、次のように、名詞の[U] [C]の使い分け情報をできるだけ詳しく示すように試みた。

いさかい [諍い]

(もめごと) **trouble** [U] 《◆具体的事例は[C]》
; (口論) **quarrel** [C] || あそこはいつも家族のいさかいが絶えない They always have family troubles [quarrels].

上の説明から、[C]名詞としての trouble を含むこの用例では、具体的ないさかいごとが話題になっていることがわかるだろう。さらに「いさかいは避けるべきだ」に見られるような抽象的で一般的な「いさかい」は、[U]用法の trouble で表現できることが理解できるだろう。

別の例を挙げよう。chalk という名詞は、「種類」を表す場合は[C]だと説明される。しかし、この情報だけでは、「黄色いチョーク」と言うときに、a yellow chalk と yellow chalk のどちらが正しいか確信を持ってないだろう。そこで、見出し語「チョーク¹」では、各種語法書やコーパスを調べ、次のような使い分け情報を示した。これでこの辞書のユーザーは、yellow chalk が正しいことがわかるだろう。

チョーク¹ <白墨>

chalk [U] 《◆複数本のまとまりを表す時は[C]で〜s》 || 1本の長いチョーク a long piece [stick] of chalk 《◆*a long chalk とは言わない》/ さまざまな色のチョーク chalks of

different [various] colors

⑤自然なコミュニケーションを学ぶための Communication Box(CB)を新設したこと

かつて私が運転する車に米人を乗せた時のこと。彼が私に You may want to turn right there. と言ったことがあった。恥ずかしいことに、私は「別に右に曲がりたくはないが…」と思ってしまった。You (may) want to ... が「アドバイス」を表す表現であることを知らなかったからだ。

和英辞書の見出し語だけに頼っていても、you (may) want to ... を使って助言できるという知識は得られない。そこで、第3版では同じ概念・機能を表すことばを CB として挙げ、このような表現の検索を可能にした。You (may) want to ... については、CB の「アドバイス」に次のように説明した。

You want to ... は、しばしば助動詞 may を伴って、「…してはどうですか」という控えめな助言を表す。

必要に応じて CB には「対応表現」も示した。例えば “I feel terrible. I didn't pass the exam.” という相手にどのように対応すべきだろうか。 “That's too bad.” や “I'm sorry to hear that.” のような同情を表すことばしか思いつかない人も多いのではないか。そこで CB の「悲しみ」では、一歩掘り下げた対応表現として、「慰めようと、相手の努力を認めたり、次の機会へ目を向けさせたりする」ための用例を示した。

“Well, I know you worked very hard. Next time, you'll pass for sure.”

このような特長を持った第3版で、私たちは「和英辞書は使える」ことを証明したいと思う。自信を持って英語を使うことができる「明るい」筋道を示したいと願っている。

(なかむら みつお・関西大学教授)